

メスに食われないようにコソコソと… ジョロウグモの交接

9月中旬、水元公園でジョロウグモの巣をたくさん見つけた。ジョロウグモ（女郎蜘蛛）は、学校の校庭横や裏門の横などで大きな網を張っている様子が見られ、都会で最も身近に見られるクモの一つだ。からだが大きく、黄色と黒と赤の毒々しい配色はよく目につく（たぶんそれが苦手な人も多いはず）。

巣の一つに目線に向けたとき、「ん？」と違和感を覚えた（違和感があったらとにかくじっくり見てみるのが自然観察のコツ）。よく見ると、ジョロウグモのお腹の上に小さなクモが乗っている！一瞬、エサかな？と思ったが、ちゃんと動いている。これはオスだ！オスちっちゃ！先に説明した毒々しい姿はじつはメスの話で、ジョロウグモは雌雄で全く違う見た目をしている。生物の雌雄の形態の差は「性的二型」というが、ジョロウグモはずいぶん極端だ。

なぜ雌雄差が出るのだろう？メスの体が大きいのは、卵を産むためだと分かる。一方、オスの見た目は、メスへのアピールのために派手になったり（クジャク）、戦いのために武器が発達したりする（カブトムシ）。面白いのはジョロウグモの例で、オスが極端に小さい理由は諸説あるようだが、「**メスに食われないように交尾を済ませるため**」という説があるのだそうだ。オスはメスの巣へ行く道中で捕食者に狙われやすく、そもそもオス自体の数が少ない。その結果、オス同士の争いが起こりにくいのでからだを大きくしておく必要がない。だから、**交尾を成功させることに特化して、小型化した**というのだ。

せっくなので、交尾の様子をじっくり観察してみる。クモの交尾は特殊で、オスは精子を一度、手（触肢）に移してからメスに渡す。手が交尾器のような役割を果たすのだ。特殊ゆえに正確には「交尾」ではなく「交接」と呼ぶ。観察してみても面白いものを見つけた。オスが片方ずつ手をメスの交尾器に差し込むと…**手の根もとがぷっくり膨らんだ！**どうやらスポイトのような構造で精子を送り込んでいるようなのだ。独特だなあ。交接の時間は結構長くて、右手を差し込んでぐりぐりしたと思ったら今度は左手、またまた右手、と交互に続ける。あんまり長く続けるもんだから、**そんなにもたもたしてたらメスに食われちゃうんじゃないか？！**とハラハラしながら観察した。



ジョロウグモの大きなメスと小さなオス
メスの巣にオスが居座っている。オスはメスに比べて極端に小さく、色彩も全然違う。ジョロウグモのオスは成熟すると巣を作らず、メスの巣に忍び込んで交尾の機会を伺う。これだけの体格差があるので、迂闊にメスに近づくと食べられてしまう。オスにとっては命がけの交尾だ。

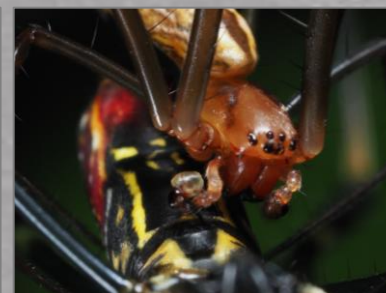


オスがメスのからだに乗り交接を始めた

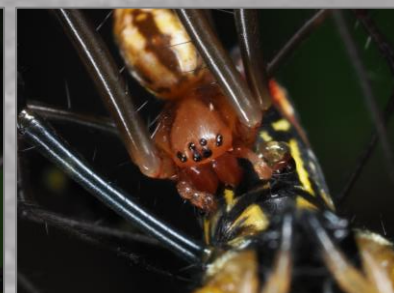
メスが脱皮したばかりでまだ動きが鈍い時など、食われる危険性が低い時にオスはメスに乗っかる。そして腹部にあるメスの生殖器に触肢を差し込む。クモの交尾はかなり独特で、オスは精巣から精液を一度体外に出し、触肢に吸い込んでからメスに注入する。要は、おしりから出した精子をスポイト状の手で吸ってメスに渡すのだ。



触肢をメスに差し込む
キバの横にある短い手（触肢）を使ってメスの腹でゴソゴソと何かをしている。まずは右手を差し込んでいるようだ。



あ！触肢が膨らんだ！
差し込んでいた右手（右触肢）をひねるような動作をすると、ぷくっと触肢が膨らんだ！溜め込んでいた精子を送り込んだのだろうか。



反対の触肢も差し込み、膨らませる
今度は左手を差し込んだ。やっぱり触肢が膨らんでいる。メスの腹部には2つの開口部があるようで、左右それぞれに触肢を差し込む作業を繰り返していた。